

山口県コンクリート診断士会 コンクリート調査手法など学ぶ 2022年度例会を開催

山口県コンクリート診断士会（瀬原洋一会長）は9月30日、宇部市東梶



返の常盤工業会館で「2022年度例会」を開催した。会場とオンライン配信によるハイブリッド方式で行われ、中国5県の診断士会会員やME山口、山口県土木建築部の職員ら50人以上が参加し、コンクリートの調査手法に関わる技術などを学んだ。

はじめに、瀬原会長が「土木の関係者の間では、土木施設は危ないという認識を持っていた中で12年の笹子トンネル天井板崩落事故。その後、一気にインフラの保全が重要となり、点検や診断の業務、工事が盛んに行われ

るようになった。技術は日進月歩で進んでおり、ICTも踏まえながら効率よく業務を進める流れになった。今年度のコンクリート診断士の試験結果の通知が届き始めている。資格者が1人でも多く山口県内に誕生し、また気運をつくる場を提供するのが当会の目的で、取得者だけではなく資格取得を目指す人、思いのある人が集まっている。半日だが、技術の習得と同時に楽しんでほしい」とあいさつした。

最後に中村秀明副会長はアメリカでは、1980年代にインフラの老朽化が進み荒廃するアメリカと呼ばれていた。笹子トンネルの事故以来メンテナンスに舵を切っている。山口県でも上関大橋の損傷などがあり、これからもうこういう事例は増えてくると思う。アメリカより30年遅れて日本もインフラの老朽化が進むため、コンクリート診断士の責任や役割は増す。コンクリートの診断だけではなく、今日の講演にあった機器分析以外にもPC橋、鋼橋などたくさん勉強していかなければならない。今後は、幅を広げて勉強できる会になればと思う」と挨拶して例会を終えた。

例会では、太平洋コンサルタントの邊木蘭隆太氏が「日本の社会資本整備の維持に関する傾向と現場調査事例ほか」と題し、インフラの老朽化と対策、予防保全と事後保全、現場調査の事例、形式別橋梁点検のチェックポイント、ASR試験フローについて説明した。塚本師子氏は「機器分析を用いたコンクリートの劣化調査事例」について、調査事例を基にXRF（蛍光X線分析）やXRD（粉末X線回折）、SEM（走査型電子顕微鏡）、EPM A（電子線マイクロアナライザー）を用いたコンクリートの硬化不良やポップアウト、エフロレッセンス、色むら、塩